

救急室における臨床検査技師の役割と活動報告

(地方独立行政法人京都市立病院機構京都市立病院 臨床検査技術科)

森 恵里子 井上 歩 園山 和代 宮川 大樹 山田 雅

要 旨

当院臨床検査技術科では、救急室業務支援を目的とし、2020年9月より救急室に臨床検査技師を配置させる取り組みを開始した。当初は週3回の午後みの配置であったが、2021年10月からは週5回の午後に救急室業務を行っている。臨床検査技師が行う救急室業務は、超音波検査、心電図検査、採血・採血補助業務、患者移送などの看護診療補助業務が中心であり、その件数は開始当初から徐々に増加している。2021年12月に救急室業務に携わる医師・看護師を対象にアンケートを実施したところ「臨床検査技師の救急室配置についてどう思うか」に対する回答は「必要だと思う」が全体の約80%に及び、肯定的な意見が多数であった。「役立っていると感じている内容について」に対する回答は、超音波検査が最も多く、次いで心電図検査、検体搬送、採血・採血補助業務の順であった。2021年10月1日施行の臨床検査技師などに関する法律の一部改訂により、検査技師が採血時に静脈路確保を行うことが可能となった。それに伴い、病院の導入方針の決定次第であるが、今後より幅広い業務支援につながる可能性がある。その他、人材育成についても積極的に取り組んでいく必要がある。(京市病紀 2022; 42: 67-70)

Key words : 救急, 臨床検査技師, タスクシフト, タスクシェア, チーム医療

はじめに

当院救急室では医師・看護師をはじめ多職種が関与し、各々の専門性を活かしながら診療を行っている。臨床検査技術科では、救急室業務支援を目的とし、2020年9月より救急室に臨床検査技師1名を配置させる取り組みを開始した。2020年9月から1年間は月曜・水曜・木曜の週3回の午後みの配置であったが、2021年10月からは月曜から金曜の週5回午後に運用拡大し、救急室業務を行っている。

現 状

救急室で臨床検査技師が行う主な業務は、超音波検査、心電図検査、採血・採血補助業務、看護診療補助業務などが挙げられる。看護診療補助業務には、患者へのモニター装着業務や患者移送、検体搬送、更衣介助などが含まれる。患者不在時には、ベッドメイキングや機器消毒などの清潔管理業務なども行っている。日々の業務については分類ごとに件数を記録しており、毎月救急科部長・看護師長に提出している。今回は開始2020年9月から2022年3月に至るまでの救急室での活動について報告する。

業務件数は超音波検査、看護診療補助業務を中心に、救急室配置開始当初から徐々に増加している(図1)。超音波検査の領域別件数については、心臓領域が最も多く全体の約半数を占め、次いで腹部領域、頸動脈領域、FAST(外傷時の腹腔内出血評価)、下肢静脈領域の順に多い結果となった(図2)。臨床検査技師の配置によりこれらの領域の超音波検査が救急室で迅速に行うことが可能となっている。

その他、臨床検査技師の役割として、救急室と検査室の窓口となり円滑なコミュニケーションを担っている。例

えば採血量や特殊採血方法など検体に関する問い合わせや、緊急輸血対応、PCR検査に関する相談に迅速に答え

救急室で臨床検査技師が行う平均業務件数/日

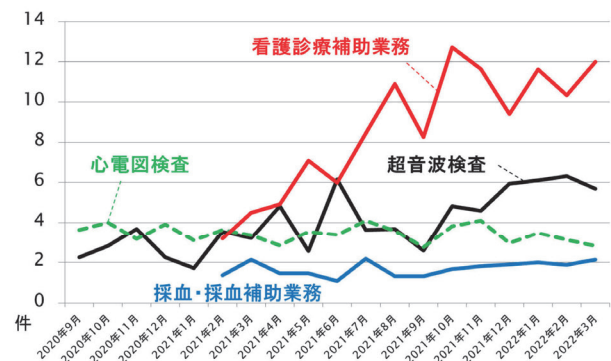


図1

救急室で実施した超音波検査の領域別件数

集計期間: 2020年9月~2022年3月(N=1030)

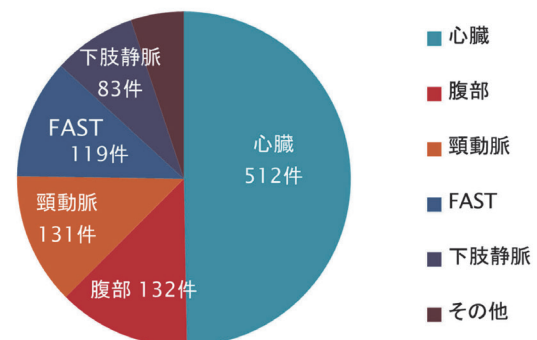


図2

られるようにしている。また検体採取容器管理や救急室で実施された検査のデータ処理も行っている。それ以外にも、月1回開催されるERミーティングへの参画や、研修医を対象としたエコー実技講習を不定期で行っている。

アンケートについて

「救急室における臨床検査技師についてのアンケート」として、2021年12月、救急室業務に携わる医師・看護師を対象にアンケートを実施した。このアンケートは現状把握と今後の業務改善を目的とし、無記名で行った。医師は常勤医師・応援医師・研修医を含む35名に配布、看護師は26名に配布し、そのうち医師27名・看護師22名から回答を得た。全体で約80%の回答率であった。その内容を提示する。

まず、「臨床検査技師の救急室配置についてどう思うか」の質問には、「必要だと思う」の回答が医師93%・看護師91%であった(図3)。理由として「重症患者対応と一緒にしてくれる」、「ふと疑問に感じたことを気軽に質問できる」などの意見があった。「不必要だと思う」と回答したのは医師1名で「まだ一緒に仕事をしたことがない」という理由であった。看護師の回答に関しては未記入が2名分含まれており、明確な回答の中では100%が肯定的な意見であった。

「臨床検査技師が役立っていると感じるのはどんな時か」の質問に対する回答は、医師・看護師ともに超音波検査が最も多く、専門性を生かした業務が望まれていることが分かった(図4)。その他、心電図検査や採血業務など多項目について「役立っている」との回答を頂き、多忙な救急室内では幅広い業務を行う人員が望まれていることも分かった。

考 察

臨床検査技師の救急室配置当初は、業務内容も全て手探りの状態であった。その中で、救急室スタッフの方々から現場のニーズを確認し、実施可能な業務を検討した。業務内容と件数は細かく記録し、担当技師間で共有し、救急科部長・師長と随時協議を行った。そこから見えてきた課題や問題点については解決に努めた。日々変化するコロナ状況下で、PCR検査体制についても救急室とコミュニケーションをとることで、円滑な実施につながったのではと考えている。このようなことを繰り返し、業務を徐々に拡大することができたと思われる。

また救急室業務に携わることで、急性腹症や大動脈解離・ショックなどの急性期症例を数多く経験することができ、バイタル観察や検査を通して、臨床検査技師としての成長にもつながる場だと考えられる。それ以外にも救急室で協働する中で、医師・看護師など他職種スタッフと日常的にコミュニケーションをとることで、病棟などの他場面でも以前よりも気軽に声をかけられるなど、職種間の距離も縮まった。一方で、救急室では患者の死に直面することで精神的にネガティブになることや、検査

アンケート『臨床検査技師の救急室配置についてどう思うか』に対する回答

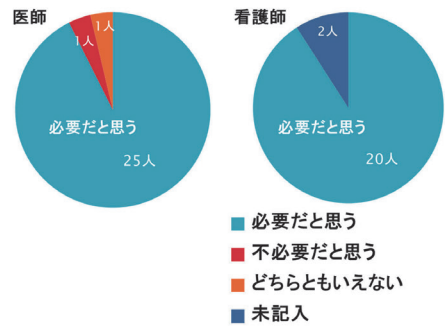


図3

アンケート『臨床検査技師が救急室業務で役立っていると感じるのはどんな時か(複数回答可)』に対する回答

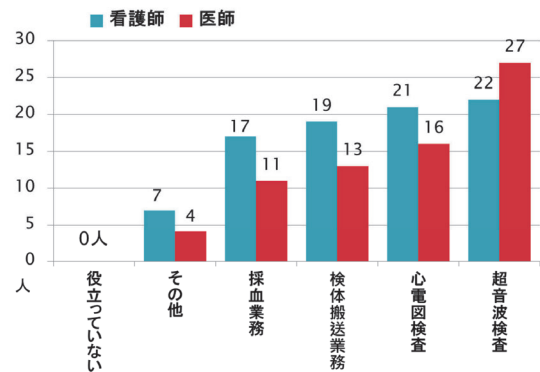


図4

へのプレッシャーを感じる場面など、まだまだ未熟な面は挙げられるが、少しでも患者のために救急室業務に貢献できるよう努めていきたい。

課 題

2021年10月1日施行の「臨床検査技師等に関する法律施行令の一部を改正する政令等の公布について」により、他のいくつかの職種と同様に、臨床検査技師が実施可能な医療行為が10項目追加された。中でも注目すべき項目は、臨床検査技師による採血時静脈路確保である。先述のアンケートで、「救急室における臨床検査技師のルート採血についてどう思うか」について問いかけたところ、「必要だと思う」の回答が医師89%(24名)、看護師86%(18名)に及んだ(図5)。その意見の多くが「多忙時に行ってもらえると助かる」という内容であった。「不必要だと思う」の回答は、医師1名・看護師1名で、「医師・看護師で十分」、「誰でもできるので、研修してまで人員を増やすメリットがない」といった内容であった。本格的な運用開始までには研修・リスク管理などの課題もあるが、より幅広い業務支援につながる可能性はあると考えられる。

アンケート『救急室における臨床検査技師のルート採血についてどう思うか』に対する回答

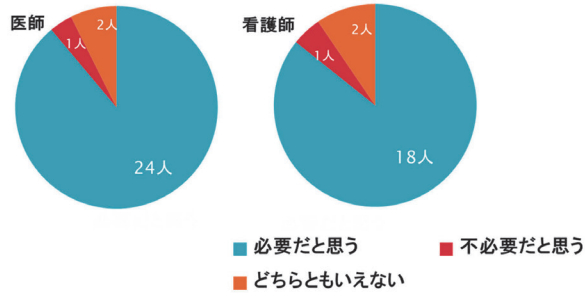


図5

そのほかの課題として、臨床検査技師の人員育成が挙げられる。2022年5月現在、主に救急室業務に携わる臨床検査技師は3名であるが、今後も継続して活動するためには、従事できる技師の育成に取り組む必要がある。現在、育成に向けてチェックシートを作成して準備をすすめている。

おわりに

京都府内の救急出動件数は年々増加しており、救急医療のニーズは高い¹⁾。一方で厚生労働省の定めた医師の働き方改革に伴い、医師から他職種へのタスクシフトが注目されている。当院臨床検査技師の救急室参入当初は限定的な時間帯から開始し、手探りの状態であったが、医師・看護師と現場を通じて協議を重ね、徐々に運用を拡大し業務件数も増加してきた。タスクシフトの観点からも積極的に継続して取り組んでいきたい。また、臨床検査技師を救急室に配置することで検査の枠にとらわれず、これまでにない業務支援を行うことができる。これからも検査室内だけでなく、より臨床の現場で患者に貢献できる存在を目指していきたい。

引用文献

- 1) 平成30年度 救急要請に係る検討会～高齢化社会における在宅医療にも対応した救急体制の構築～報告書 平成31年3月京都府・京都市 [internet]. <https://www.pref.kyoto.jp/shobo/documents/yosei-h30-all.pdf> [accessed2022.04.29]

Abstract

Role of the Clinical Technician in the Emergency Room and Reports of their Activities

Eriko Mori, Ayumu Inoue, Kazuyo Sonoyama, Daiki Miyakawa and Masashi Yamada

Department of Clinical Testing, Kyoto City Hospital

The purpose of our Clinical Testing Department is to support the emergency room. In September 2020, we began assigning a clinical technician to the emergency room. At first, the technician was assigned to do tasks in the emergency room in the afternoon, three times a week. From May 2021, the technician was assigned to do tasks in the emergency room five times a week. The tasks of the clinical technician in the emergency room were mainly to support the nursing activities including ultrasonography, electrocardiography, blood sampling and patient transport. The number of cases handled increased since the start of the program. In December 2021, in response to the questionnaire on how they felt about the assignment of a clinical technician to the emergency room, 80 % of the doctors and nurses responded that the assignment was necessary. The tasks they felt most helpful were the assistance in electrocardiography, transport of specimens for tests, blood sampling and support of blood sampling, in this order. The amendment of the regulation issued on October 1, 2021 allows the clinical technician to secure the vein for blood sampling. As soon as the hospital provides the guidelines, further task share in various areas will become possible. Furthermore, it will be important to educate the staff aggressively.

(J Kyoto City Hosp 2022; 42:67-70)

Key words: Emergency, Clinical technician, Task shift, Task share, Team medicine